

いつの頃からだったでしょうか。みどり町に、あるうわさが広まるようになりました。さして珍しくもなく、とてもありふれたうわさです。世界中どこにでもありそうな、そんなうわさでした。

ただ、私は知っているのです。そのうわさには続きがあることを。

ながおくんは、歩くことが好きでした。毎朝五時半に起床し、約一時間かけて、近所のみどり町公園をぐるりと歩いて回ります。晴れの日も雨の日も、その時々を自然を全身で感じながら歩くのです。

その日も、ながおくんはいつものように散歩をしていました。暖かな空気の満ちた、五月の日です。空には、少し前に顔を出したオレンジ色の太陽が、ゆらゆらと揺れています。道の両脇に植えられた種々の木々には、朝露に湿った新緑の葉が繁っています。

歩き始めてから三十分くらい経った頃でしょうか。ながおくんは、いつもの場所でふと足を止めました。

「ふう。」

公園の中央に位置する小さな池を正面に臨み、温まった体の中に、朝の新鮮な空気を送り込みます。少しの間、呼吸を整えた後、ながおくんは、ポーチからミネラルウォーターを取り出し、ごくごくと喉に流し込みました。

——みどり町公園のお地藏さんは幸せの使者。——

最近広まったそのうわさを、ながおくんはふと、思い出しました。

「お地藏さん、この近くだったかな。」

くるくるとペットボトルのキャップを閉め、ながおくんは木々が生い茂る日陰の方に足を向けました。木陰に入ると、ひんやりとしています。さっきまで浴びていた陽光から離れ、違った世界に足を踏み入れた気分になります。小さな池を右手に、ながおくんはずんと進んでいきました。

五分ぐらい歩いたでしょうか。気が付くと周りの景色は一変し、道脇には背の高い草が多くなってきました。両端に木の杭が打ち込まれた遊歩道も、いつしか、その境界をあいまいにし、今自分が歩いているのが、道なのか林なのか森なのか、にわかには判別できないようになっていきました。その中にぼつりぼつりと小石が混じっています。どうやらあまり人が訪れない場所のようです。

「みどり町公園にこんなところがあつたんだな。」

新しい発見に心ときめく一方で、ながおくんは、温まった体、降り注ぐ陽光、みずみず

しい新緑といった、ついさっきまでの爽やかな光景が、自分からすっかり遠いところに行ってしまったような、うら寂しい気持ちになるのです。

「あのうわさ、本当かな？」

進むにつれ、当初の期待に確信を帯びなくなってきました。ご利益のあるお地藏さんであれば、もっと人が通った形跡があっても良さそうです。道なりももっと整備されていても良さそうです。さっきまで道だと思って歩いていたところも、今ではその幅をせばめ、道と林の境界を、ますますあいまいにしています。

「何をお願いしようかな。」

ながおくんはわざと声に出して気持ちを盛り上げ、波風の立ち始めた心を収めようと務めます。奔放に伸びた草木に混じり、小石も増えてきました。獣道の感が増してきます。ながおくんは、そろりそろりと注意深く歩きました。

「あつ。」

小さな悲鳴とともに、ながおくんは尻もちをついてしまいました。ぬかるみに足を取られてしまったのです。日が当たらないせいか、何日も前の雨の名残がそこかしこに見られます。べつとりとまとわりつく泥をぬぐい、体を起こそうとした時、ながおくんは、あるものに心を留めました。

「石？」

足下に散らばっていた小石に混じり、一つだけ異彩を放つものがありました。ながおくんは、初め、それが何なのか分かりませんでした。石ではなく、蛙かなにかの生き物がうずくまっているのだと思いました。しかし、蛙にしては動かない。石にしてもどうも生きているような気がする。その物体を、自分の経験にある、どこに分類して良いか分かりませんでした。

「あつ。」

恐る恐る近付こうとした、その時。ながおくんはたじろぎました。その石と思しき物体が、一瞬光ったように見えたからです。その瞬間、ながおくんは、これ以上関わってはいけないと直感しました。美しく、好奇心を駆り立てるような希望の光ではなく、どこか落ち着かない、禍々しささえたたえたような不安を誘う歪んだ光。ながおくんは、一目散に帰って行きました。

ながおくんの行動は正解でした。

それ以上進んでいたら、うわさに引き寄せられてやってきた人々を観察するだけの存在、そしてその行方を見守るだけの存在、石のような外見を持ったそんな存在になってしまうのです。そして。

もうこの世界には戻れません。そう、私のように。

(二〇一〇年六月五日)